

【問合せ】
市史編さん室 ☎ 017-732-5271

アーケード時代の青森市

『新青森市史 通史編第4巻 現代』が刊行されました。今回は、その中から高度経済成長期の青森市中心街に関する歴史を、少しだけ紹介しましょう。

新町通りのビル街

戦後復興期から高度経済成長期にかけて、新町通りにはビルが建つようになりました。その中で昭和30年（1955）に開館の自治会館は、レストランや屋上のビアガーデンで人気を集めました。

ビルといえばデパートです。昭和20年代後半より、駅前通りに菊屋、上新町に富士屋、下新町に松木屋が登場しました。昭和37年には、カネ長武田が建物を改装し、県内初のエスカレーターを導入して市民を驚かせました。

昭和29年に落成した丸大ビルは、2階のレストランが、当時まだ珍しかった西洋料理を提供し市民に好評でした。

この場所でお見合いをし、結婚披露宴をした市民も多かったのです。

「横のデパート」

青森市中心街のアーケードは、昭和35年9月に完成しました。アーケードは雨や雪を避けられ、買い物客には好評でした。市民は小売店舗やデパートで買い物し、その合間に喫茶店で休憩し、おしゃべりを楽しんだのです。市民が常にアーケード街を回遊するので、アーケード街は「横のデパート」と呼ばれました。

「横のデパート」となった新町には、市民に親しまれ歴史を重ねてきた店舗が数多くありました。昭和29年頃、それらの店舗をつなぐかのように「新町のアーチ」が設置され、夜はネオンが輝き華やかさを演出しました。

柳町通りは昭和35年の夏まで露店街でした。しかし、2年後にはアーケードができました。「横のデパート」と



<写真1> 新町のアーチ
昭和47年4月23日 広報広聴課所蔵

東映劇場、青森松竹映画劇場など、青森市の映画館通りと呼べるほど映画館が集中していた。昭和49年に中三百貨店が開店して以降、街並みが激変し、後に

なった柳町通りで有名だったのは、昭和24年に開店した洋菓子屋の青森コロンバンでしょう。

さまざまな顔を持つ繁華街

《夜店通り 図①》 新町通りから国道にかけて南北に連なる通りで、戦前から繁華街を形成していました。戦後も目抜き通りと呼ばれ、ねぶた期間中は赤い小さな提灯がつり下げられ、独特な雰囲気醸し出していました。

《仲町通り 図②》 夜店通りから国道を南進した通りです。ここでは、何と言っても映画館やボウリング場など各種の娯楽施設を集めた日活レジャーセンターが有名でした。

《昭和通り 図③》 新興劇場、青森

アーケードも建設されました。

《国道古川通り 図④》 西部地区へ向かうバスターミナル。亀屋みなみ、工藤パンビル、工藤パン第1営業所がありました。バス待ちの人々が買い物に立ち寄る格好の場所でした。

《ニコニコ通り 図⑤》 闇市場ができて以来、今もお通りの両側に多数の露天商や行人が、軽トラックやリヤカー等で野菜や果物を持ち運び、品物を売りさばいています。今でも県外からの観光客は、ニコニコ通りの雰囲気驚き、カメラを向けます。

《中央古川通り 図⑥》 小さな飲食店や長屋風の飲み屋街が多数ありました。その代表格が国際ホテル周辺にある鈴蘭通りと、青森まちなかおんせん



<図> 各通りの位置

だ健在ですが、後者はなくなりました。《いろは通り 図⑦》 市場が集中する通りです。県内初の全がいアーケードを計画したことがあり、商店街の人々が岩手県盛岡市肴町のアーケード街を視察したことがあります。

《八甲通り 図⑧》 かつて柳に囲まれ水路がありました。昭和29年に落成した消防署の望楼には署員が常駐し、市内の火災を発見すべく交替で見張りをしていました。

松木屋と芝楽

松木屋デパートは市民があこがれたデパートでした。増改築で客を飽きさせず、都会のブランドを集め、大食堂

や屋上に子どもたちの遊び場を設けるなど、女性と子どもの気持ちをつかんでいたからです。

松木屋で買い物した後、食事やお茶という習慣は、買い物好きな女性たちにとっては、何よりの楽しみでした。市民が足繁く通った食事処が、昭和28年8月に津島勲が始めた大衆割烹芝楽でした。当時、庶民のごちそうであった寿司・天ぷら・ウナギに、釜飯など、豪華な和食料理で人気を集めました。

津島は常に時代を先取りする傾向が強くありました。電子レンジや自動食器洗い機を導入し、接客する女性たちの制服も、白い襟をつけた紺ないし空色のワンピースに、三つ折りの白い靴下を履いた斬新なものでした。



<写真2> 松木屋デパート
昭和39年頃 『青森は復興した』より転載

芝楽はカネ長武田デパートとほぼ同じ時期に、エスカレーターを設置していません。何度も乗って大人にしかれた子どもが多かったといえます。芝楽に通った人たちに共通する思い出の多くは、家族や仲間内との団らんにありました。芝楽という店名は、芝生の上で風呂敷を敷き、家族で食事をするのが楽しいこと、という理由で名付けられたのです。

しかし、洋食が普及し、ファストフードの文化が浸透するに伴い、芝楽の斬新性は薄れ始めました。そして自動車社会の進展に伴い、駐車場がないこともあって、平成7年6月に芝楽は閉店しました。その8年後、松木屋も閉店しました。

戦後の復興期から高度経済成長長期にかけて、喫茶店と共に数が多かった歓楽施設にキャバレーがありました。青森県はバーやキャバレーが多く、昭和40年4月現在で484軒もあり、東北地方では宮城県の595軒に次いで多かったのです。ちなみに青森市で有名だったキャバレーは、本町のゴールドと堤町のフロリダでした。



<写真3> 閉店間際の芝楽
平成7年6月21日 津嶋栄子さん提供

県都の歓楽街

青森市の昭和30年代は喫茶店がたくさんありました。店どうしの競争が激しかったのですが、看板娘のいる店が人気を集めました。当時の喫茶店の多くは、スナック的要素を兼ねていたからです。このため、子どもや学生の入店を断る喫茶店も多かったのです。学生服のまま入れる喫茶店は、工藤パン、コロパン、ガトーしろたえ、サンドリオンくらいでした。

戦後の復興期から高度経済成長長期にかけて、喫茶店と共に数が多かった歓楽施設にキャバレーがありました。青森県はバーやキャバレーが多く、昭和40年4月現在で484軒もあり、東北地方では宮城県の595軒に次いで多かったのです。ちなみに青森市で有名だったキャバレーは、本町のゴールドと堤町のフロリダでした。

今回は紙面の都合で、中心街だけを紹介しましたが、青森市の郊外にも繁華街は展開しています。自動車社会となった現在、いずれの繁華街も、新しくできた大型商業施設に押され気味です。しかし、市民が集まる拠点として、今なお重要な役割を果たしているのです。詳しくは『新青森市史 通史編第4巻 現代』をご覧ください。

（『新青森市史』通史編執筆協力員 中園裕（県庁県史編さんグループ））